

通常の学級における特別支援教育を推進するための 担任への支援の在り方[†]

—小学校教員へのインタビューから—

加藤 恵子*・司城紀代美**

高根沢町立東小学校*

宇都宮大学大学院教育学研究科**

「特殊教育」から「特別支援教育」への転換から10年経ったが、支援を必要とする児童が在籍する通常の学級（以下、通常学級）の担任自身が多く困難を抱えているという現状がある。現在の小学校での学級経営は担任の力に委ねられていることから、担任にかかる負担はかなり大きいと思われ、本研究では担任を支援するための有効な方法を考えるため、小学校教員へのライフストーリーインタビューを行った。その結果、今までの経験や教員としての信念・直感に従って考え、責任感をもって対応したことが、対象児や周囲のプラス面での変容につながらないときに、自己効力感が低下し、このタイミングで周囲からのサポートを受けることが重要であること、適切なタイミングで適切なサポートを受けることができると、困り感を増幅させず、考え方や対応を変更しようとする力に変えていくことができることが明らかになった。このようなサポートが機能するためには、困っていることや悩んでいることを外に出せる文化を作り出すことが必要である。

キーワード：通常の学級における特別支援教育 学級経営 ライフストーリーインタビュー

1. 問題と目的

障害の程度に応じ特別の場で教育を行う「特殊教育」から、障害のある児童生徒一人ひとりの教育的ニーズに応じて適切な教育的支援を行う「特別支援教育」への転換から10年経った。各小学校でも特別支援教育に対する一定の認識と、支援の実施が進んだように思われる。しかし、その認識は正しく、その支援は支援を必要とする児童にとって有効なものになっているだろうか、今一度見直す必要があると考える。なぜならば、支援を必要とする児童が在籍する通常学級の担任自身が多く困難を抱えていると考えられるからである。支援を必要とする児童

が、通常学級において「自分の学級は安心できて居心地がよく楽しい」と感じるためには、その学級に在籍している他の児童や担任がそう感じる学級でなければならない。現在の小学校での学級経営は担任の力に委ねられていることから、担任にかかる負担はかなり大きいと思われる。そこで、担任を支援するための有効な方法を考えたいと思い、本テーマを設定した。

2. 方法

(1) ライフストーリーインタビュー

このインタビューは、教員が支援を必要とする児童が在籍している通常学級を担任した時の思い、特にどのようなことに困り感を感じたのか、またその軽減や解消に役立ったものは何かについて実態を知ることにより、教育現場における課題を明らかにし、よりよい担任支援の方策を探求するために行う。そのために、ライフストーリーインタビューを採用する。やまだ（2007）によると、ライフストーリーインタビューにおいては客観的事実が存在するという認識論ではなく、事実は対話によりその都度構築されるという認識論に立脚する。客観的な事実は存在

[†] Keiko KATO*, Kiyomi SHIJO**: The way of support to the homeroom teacher to promote special needs education in ordinary classes.

Keywords: Special Needs Education in Ordinary Classes. Class Management. Life Story Interview.

* Higashi Elementary School

** Graduate School of Education, Utsunomiya University

(連絡先: shijol@cc.utsunomiya-u.ac.jp)

しないとしても、語り手がこれこそ事実だと実感している出来事、つまり語り手にとってのリアリティは重視すべきであるとされる。この方法で語られた出来事や思いは、語り手にとってのリアリティであり、「思い＝特別支援教育に対する認識」「困り感＝特別支援教育における問題点」「困り感の解消＝担任支援の方策」が明らかになると考えられる。

(2) 調査の概要

栃木県内の小学校に勤務する教員14名の協力を得て、ライフストーリーインタビューを行った。協力者は、30代から40代の男性9名、女性5名である。インタビューでは、今までに担任した支援を必要とする児童が在籍する学級での思い出に残るエピソードを聞きたい旨を伝えた。実際のインタビューでは、一人の児童もしくは数名の児童に焦点を当てて話す協力者と、学級全体もしくは学校全体に視点を当てて話す協力者がいた。いずれも、語り手が出来事を語っていく途中で、聞き手が語り手に対してその時々を思いを尋ねながら進め、最後に今その当手を振り返ってどう思うかを聞いた。インタビュー時間は一人あたり30分から1時間程度である。インタビューは大学内の一室で1対1で行った。なお、インタビューは全て協力者の同意を得て録音し、データの収集と公表についても同意を得た。本分析は担任としての経験を語った12名から得られた13エピソードで行った。

(3) 分析の手順

録音された内容を書き起こし、一人ひとりのデータに目を通してみると、「担任の思い」は時間を追うごとに変化していることがわかった。その変化は、担任として行った取組や対応により対象児や学級、他の児童の様子に変化したことによるものであると推察される。また、担任後月日が経った現在では当時とは異なる思いになっている担任が多いことがわかった。そこで、6つのカテゴリー「思い1（担任前・当初）」「思い2（担任中）／取組・対応」「思い3（振り返って）」「困り感」「困り感の解消」「その他」に分けてインタビュー内容を整理し、そのカテゴリーに沿って分析を行った。

3. 結果と考察

(1) 特別支援教育に対する意識・思い（担任する以前・担任当初）

いずれの場合も、過去の経験が大きく影響していることがわかる。自分の経験はもちろんのこと、その学級の前担任や、別の学級担任の大変さを間近

で見ていたことが強く心に残っていると思われる。また、初任時など経験がなくよくわからないが、教育に対する「熱意」という点で「自信」をもっていたケースもあった。前年度までに「大変な学級だ」という認識をもっていた場合、その学級の担任を自分が任せられたということに「他からの評価」を感じ、それが「自信」になっていると思われるケースも複数あった。

しかし、「自信」と捉えられる発言の中には同時に「不安」を感じさせる言葉が多く見られた。エピソードから、担任当初は対象児のマイナスな部分に目が向いていることがわかる。今までの経験により「自信」はあるが、その経験を生かすことができるケースなのかどうかかわからないという点においての「不安」があると思われる。担任する以前に入っている情報は、子どものマイナスの面のみであることが多く、経過や対応について知らされることはほとんどない。マイナスの情報や事実をどう捉えるかという問題が大きいように思われる。

(2) 特別支援教育に対する意識・思い（担任中）

担任をしている最中の特別支援教育に対する意識は、実際の対応や取組の中に表れていると考えられる。どの教師も「対象児を理解する」ことや「対象児と自分（担任）がよい関係を築くこと」を大切にしている。対象児のできない部分よりも、よい面を見つれたりうまくいっている部分を生かそうとしたりしていることがわかる。また、望ましくない言動を「不快」とみなしてしまうのではなく、言動の背景にあるものを探ろうとしたエピソードが多数出てきた。

さらに、「他の児童の不満を解消すること」「他の児童と対象児のよりよい関係を築くこと」に力を注いでいる担任が多くいた。他の児童の不満解消、協力、理解が対象児の安定を図ることに深く関わっているという考えによるものと思われる。保護者とのよりよい関係づくりやアプローチも多くの担任が行っていた。支援を進めるにあたって保護者の協力が不可欠であるということがわかる。そして、学校全体で組織として対応することの必要性和難しさを感じているエピソードも得られた。外部の機関との連携についてふれているエピソードもあった。

特別支援教育に関して、「担任一人の力で何とかしようとするのではなく、対象児の周りの児童、保護者、学校組織、外部機関の協力・連携が必要である」という意識をもっていると考えられる。しかし、実際にはこれら全てのアプローチを担任一人で行っ

ているケースがほとんどだった。

興味深いのは「授業の工夫」「役割の自覚」など、直接的に特別支援教育に関わる取組や対応ではない点に力を入れたというエピソードが複数の教員から得られたことである。これは、対象児の言動の原因を探ったところ、学習面や生活面でのつまずきや不満があることがわかり、改善を図った結果、対象児や周りの児童によい影響が見られたということだと思われる。また、対象児が在籍する学級全体をよりよいものにすることが対象児をよりよい方向に向かわせるという考えにより、授業や役割という学級全体に関わる視点からアプローチを試みたものと思われる。このことから、「学力や生活力の向上と特別支援教育は直結している」という考えをもっていることがわかる。対象児のみならず学級全体の底上げが実現される。特別支援教育に対する意識改革がなされていることがわかる。

(3) 特別支援教育に対する意識・思い（振り返って）

どの担任もエピソードで語った経験をその後の指導に生かしていた。経験を介して、特別支援教育に対する意識が変化したケースが多いが、持論を確固たる信念として再認識したケースもあった。うまくいった経験、試行錯誤した経験や失敗した経験、その全てが糧になっているといえる。

また、「特別支援教育に対する関心の高まり」や「教育観・指導観の変化、再認識」が多くの担任から挙げられた。「特別支援教育」とは対象児だけに行うものではなく「学級の一人ひとりを大切に学級全体をよりよい集団にしていくことである」という認識を高めた発言が多く聞かれた。さらに、担任一人の力には限界があるということに気付き、「協力・連携」を大切にする発言や「組織の必要性」も聞かれた。うまくいかなかったからこそ、その必要性を強く感じたと思われる。問題が大きくなる前に支援を行ってればよかったという反省から「早期支援の必要性」にも言及があった。「協力・連携」「組織」「早期支援」に関してうまくいくか否かは、特に担任の困り感を大きく左右すると考えられる。

インタビューから、特別支援教育の推進に向けた担任の意識改革は思ったよりも進んでいると思われた。しかし、自分の意識が変わったことや変わりつつあることを意識していないことが多いのではないかと考えられる。今回のインタビューでも「今振り返ると〇〇かもしれない」「新たな視点ができた」

今聞かれて改めて考えた」などの感想がどの教員からも聞かれた。自己の意識改革を自分自身で意識することも重要であると思われる。

(4) 特別支援教育に関する困り感

インタビューからは、「〇〇でなければならない」という思いをもって少しでもよくなるように日々指導にあたるものの、同じことが繰り返され改善していかないことで自己効力感がだんだん低くなり、担任の困り感が増していく過程が明らかになった。また、多くの担任から挙がってきたものとして「対象児と他の児童との関係」や「保護者との関係」があった。これは「担任役割の重さ」にかかわるものと考えられる。対象児のこと、他の児童のこと、両方の立場の保護者のこと、毎日の学習や生活に関わること、その他のことを一人の担任が全て同時に行うのはかなりの負担である。しかし、学級経営は担任一人の力に委ねられている現状がある。委ねられているからこそ責任感をもって取り組むが、うまくいかないことが増えてくるため、この点における困り感が高いと考えられる。もう1つの問題は、「自分への評価が低下することへの不安」「自信のなさ」により支援を行えないということだ。子どもにとっても担任にとっても困り感への「早期発見」と「早期支援」が必要であるといえる。

(5) 困り感の軽減につながったこと・もの

上司や同僚からの個人的なサポートがほとんどだった。困ったその時その場に来てくれるなどの物理的なサポートに加え、励ましを受けたり相談したりするなどの心理的なサポートが多かった。物理的なサポートも、そのことにより心理的なサポートを受けられると考えられる。「一人ではない安心感」が不安や悩みを軽減させる。その点では、学級で共に常に児童に接している存在がある場合には心強く感じるようである。また、「養護教諭」「特別支援学級・通級担任」からのサポートは専門的な立場からという点での安心感があると思われる。さらに、対象児や周囲の子、保護者の変容や信頼、協力が困り感の軽減につながったというエピソードも多く聞かれた。対象児の目に見えるプラス面での変容や、周りの子、保護者からの信頼や協力は、自分が取り組んできたことに対する肯定的な評価として捉えられ、自己効力感を高めるものと思われる。また、担任が考え方を柔軟にしたり変えたりする意識改革を行うことで心理的負担が軽くなったというエピソードも複数の担任から得られた。

4. 総合考察

ライフストーリーインタビューをもとに、支援を必要とする児童が在籍する通常学級担任の思いから、困り感が高まる場合と軽減される場合を整理すると図1のようになる。

今までの経験や教員としての信念・直感に従って考え、責任感をもって対応したことが、対象児や周囲のプラス面での変容につながらないときに、自己効力感が低下するのはもっともなことである。このタイミングで周囲からのサポートを受けることができないと、困り感が増幅する可能性が高まる。適切なタイミングで適切なサポートを受けられることができると、困り感を増幅させず、考え方や対応の変更をしようとする力に変えていくことができる。物理的な支援とともに心理的な支援が大きな役割を果たすと考えられる。周囲からのサポートにより「自己の意識改革」も可能になる。これにより対象児や周囲に変化が見られると、新たな「経験」となり、新たな考えが生まれ「自信」につながる。そのサイクルで子どもたちに対応をしていくことで、子どもたちが安心して楽しく過ごすことができる学級が作られていき、担任の困り感も軽減していく。

インタビューからは以下のような学校現場における課題が明らかになった。

- ①担任が一人で対応したケースが多い。担任役割の重さが困り感の増幅の主要な原因となっている。

- ②校内全体の組織が効果的に働き、担任の困り感の軽減に役立ったというケースより、個人的なサポートが役立ったというケースのほうが多い。

- ③問題が大きくなってから動き出すケースが多い。困っていることや悩んでいることを外に出せない「閉じられた文化」がこの根底にあるのではないかと考えられる。校内支援体制の形は整えられていてもこの「閉じられた文化」を開く真の意味での「組織改革」が進まなければ、担任個人のパフォーマンスで展開される子どもへの支援が一般的となり、担任の負担が増すと考えられる。

また、担任一人一人の「意識改革」は個人差が大きく、意識の差や、教育観・指導観の方向性が違う教員集団が、協働していくことの難しさが困り感を高めているのではないかと考えられる。「閉じられた文化」の中では、それらの違いを超えた協働を生み出せないといえる。それぞれの違いを認め対等に理解し合うインクルージョンの理念を教員組織においても取り入れていくことが、特別支援教育の推進において重要であると考えられる。

引用文献

- 1) やまだようこ。(2007). 質的心理学の方法－語りをきく－. 新曜社.

平成29年3月31日 受理

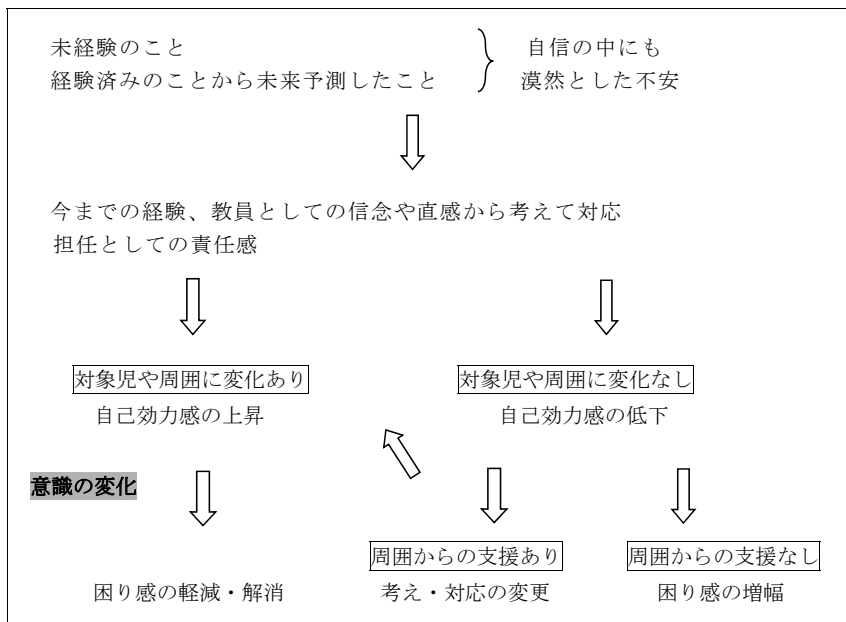


図1 担任の困り感の変化